



■第13回全九州高等学校男女秋季ソフトボール選手権大会 男子準優勝、女子ベスト8、おめでとう!!
男子：県立佐世保西2-4、県立鹿児島工業1-5
県立熊本工業1-2、県立大村工業 4-2

佐賀県で行われた九州大会で僕たち男子ソフトボール部は、準優勝と結果を残す事ができました。しかし、反省点も多く見つかったので、今大会で得た事をプラスにチーム一丸となり次大会に向けしっかり修正し優勝できるように頑張ります。又、様々な事で御指導、ご支援してくれた方々に感謝し、今まで以上に様々な事に取り組んでいきたいと思ひます。

(主将 仲宗根 悠介)

女子：県立大分西高0-2、付属佐賀女子 11-0

私達女子ソフトボール部は、佐賀県で行われた九州大会においてベスト8という結果を残す事ができました。今大会を通じて経験した事や改善すべき課題をしっかりと今後に活かしながら上位進出を目指して頑張ります。

(主将 比嘉 優陽)

■沖縄県高校PTA研究大会八重山大会報告 11/17
～PTA八重山大会～豪雨の中、雷に打たれる～

先月、PTA八重山大会が豪雨の中ありました。講師の平田大一さんは小浜島出身で、「現代版組踊」等を手がけ、県文化観光スポーツ部長を務めました。読谷とも縁が深く、三線用の黒木を読谷に植栽する『くるちの杜100年プロジェクト』を続けられています。

平田さんは東京の大学を卒業し島に戻る時、島が世界の中心だと気付きました。その時、誰かが30年後、沖縄が東アジアのハブになり、ハワイと並ぶ観光地になると予見できたでしょうか！今、沖縄はアジアの中心です。10年後、世界の中心かも知れません。読谷で学ぶ私たちには、読谷こそ世界の中心です。「深く掘れ、そこに泉あり」。読谷を深く掘れ！そこに世界の全てがある！そう気付いた瞬間、雷に打たれたようにシビれました。(PTA担当教諭 化学：瀬利宗司)

■読谷村共同募金委員会より奉仕委員委嘱状交付



11月28日、読谷村社会福祉協議会から職員の方がおみえになり、校長と喜友名朝輝生徒会長に奉仕委員委嘱状の交付がありました。赤い羽根共同募金への協力です。皆さんから寄せられた善意は、読谷村の福祉事業である【いもっ子サマースクール】【地域支え合い推進事業】【福祉

教育体験学習】【よみっ子サマー】【食事サービス事業】などに活用されているとの説明がありました。また、去年の本校での赤い羽根共同募金の取り組みに対しお礼の言葉を頂きました。今年の校内募金の取り組みについては、今月、生徒会から呼びかけがあるとのこと。詳しくは生徒会からのお知らせをみてください。

■12月の行事

- | | |
|--------------------------------|---|
| 3日(月)赤い羽根共同募金 | 14日(金)修学旅行⑤ |
| 6日(木)修学旅行生徒結団式
性・エイズ・人権講演会 | 17日(月)インターシップ学習
修学旅行新聞作成
グリーンアップ週間③ |
| 7日(金)インターシップ学習会
出発前校エンターション | 18日(火)特進クラス集会 |
| 8日(月)代ゼミ白バック自己採点模試 | 19日(水)芸術鑑賞組踊り
修学旅行委員会
第2回学校保健委員会 |
| 10日(月)修学旅行① | 20日(木)ワックス作業
全学年：3456校時 |
| 11日(火)修学旅行②
インターシップ① | 21日(金)学級懇談会 |
| 12日(水)修学旅行③
インターシップ② | 22日(土)北予備センター模試7月付 |
| 13日(木)修学旅行④
インターシップ③ | 23日(日)天皇誕生日 |
| | 24日(月)振替休日 |
| | 25日(火)2学期終業式・部活清掃 |

■本の紹介コーナー

題名：『沖縄文化論 忘れられた日本』
作者：岡本太郎



八重山には牛の数が島民の10倍を超える島がある。黒島という。その黒島に、20年以上も前になるが豊年祭を見に行った。メインイベントのハーリーは、港ではなく浜辺で行われる。太鼓、ドラや指笛が鳴るなかスタートの合図とともに青年たちは砂浜を駆け、舟を漕ぎ出した。波しぶきの立った舟は沖でユーターンしもとの場所を目指す。浅瀬に着いた舟から青年たちは勢いよく飛び降り、浜辺のスタート地点に駆け込んだ。部落の期待を背負った真剣勝負なのである。ゴール直後、力尽き浜辺に倒れ込む青年たちの姿に胸を打たれた。が、深い感動はその後にあった。応援をしていたオバアーたちが一斉に踊り出したのだ。浜辺や海に入って腰までつかり身体全体で踊った踊りは、勝ち負け関係なく青年たちの労をねぎらっていた。生活の中の、体の内側から自然に湧き出てきた踊りである。たぶんこの島では昔から、祭りや祝い事のために続けられてきた光景であろう。過去からの時の流れの中に自分自身もいることが実感できた瞬間でもあった。夏の暑い日差しと照り返しの浜辺で踊るオバアーたちの踊りのリアリティーさに圧倒されたのである。

さて先月、2025年の大阪万博開催が決定した。2度目になる。1度目の開催は1970年で岡本太郎の『太陽の塔』がシンボルであった。その10年前、岡本太郎は沖縄を旅している。東京で琉球舞踊を観てくすばらしさにすっかり惚れこんでしまい、〈沖縄に憧れ、こんな遠いところまでやってくる気になった〉。岡本太郎は芸術家の鋭い感性で、観たこと、感動したこと、感じたことを一冊の本にした。沖縄本島をはじめ、石垣島、久高島などの離島にも行っている。読谷村にも来た。〈踊る島〉の章は、〈読谷という、沖縄中部の集落で、闘牛があるというので、見に行つた〉ところから始まり、闘牛の様子が描かれている。闘牛の勝敗が決まり〈これはひどくのどかで楽しいものだった〉との感想のあと、突然〈歓喜のど真中に、女が飛び出してきた〉。そしてその後を読んで驚いた。その女性〈飼主らしい中年のおばさん〉の踊りが黒島のハーリーでのオバアーたちの踊りと重なるのである。〈アツと思うような見事な踊りである。踊っている、というよりは、やはり踊っているのだ。〉表現も面白い。〈それは私が沖縄で観たすべての踊りの中で、最も純粋で、直接的なエクスペリションだった。〉黒島の踊りもそのように感じた。〈もちろん、それは少しも儀式的なものではない〉が、〈生きるアカシの儀式かもしれない〉。〈人は生きるために、如何にたえなければならぬか。だからこそ、生きるよるこびが証しだたられなければならぬ。そのとき生活と踊りはまさに一体であり、ほとんど生きることの儀式といってよい様相をおびるではないか〉として、〈芸術の本質がまたそこに暗示されているだろう〉と続く。同じような感動的な踊りに対する一流の芸術家の表現と感性を楽しむことができた。読書ならではの。読書ならではの。